

日刊 動労千葉

79.7.24 No. 180

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八(動力車会館)
電話二二五八〇九(公電留番)二七二〇七

三里塚・ジェット闘争を自己暴露する

動労の変質を糾す、全国大会方針批判(4)

#####

動労第三五回全国大会方針について、ここでは、三里塚・ジェット闘争についてははっきりさせよう。今時全国大会方針には、三里塚・ジェット闘争について方針や総括が提起されていない。これこそまさに革マル派の路線にもとづき動労内反動分子が一貫して三里塚・ジェット闘争に敵対してきた本質を現わすものであり、反動革マル分子には住民共闘などできるはずもないことを物語っている。そして、津山大会の「一線を画する」方針が、実は動労千葉排除というセクト的思惑からの発想であることを自己暴露したものにほかならない。

#####

動労千葉が組織の存亡をかけて闘い抜いた三里塚・ジェット闘争

三里塚・ジェット闘争は、動労千葉にとって組織の存亡をかけた闘いであった。

「四つの視点」ではっきりしているように、ひとつには労働者階級の責務にかけた闘いとして、同じ地域に住居する労働者と住民・農民の闘いが全国の多くの労働者・人民の共感の中で連帯し、共闘して創りあげた闘いとしてあった。また運用効率を七%上げ、ジェット燃料輸送のための要員を捻出しようとする当面の合理化攻撃との真向からの闘いでもあり、運転保安の確立という視点からも労働組合が当然取り組まなければならない闘いであった。

動労千葉一四〇〇組合員は、三里塚・ジェット闘争を労働組合の当然取り組みべき闘いとして自らが総力をあげて決起する一方全国の動労の仲間にも働きかけ、一昨年、水上大会では、全国方針として闘うことが確認されたのである。

ところが水上大会以降、「本部」革マル反動集団は闘うことを全て放棄するばかりか敵対までし、津山大会では、「反対同盟と一線を画して住民闘

争を追求する」などというマヤカシを暴力をもって押し通したのである。

「3・1終止符論」をもって闘いの敵対者としての本性をむき出したに、動労千葉の闘いに対し、一貫して足を引っ張り、弾圧を助長させ、妨害をくり返してきたのだ。

二期工事粉砕―ジェット増送 阻止へ闘い抜こう！

革マル派が三里塚闘争に敵対しているというセクト的要因の一点をもって、動労千葉一四〇〇の労働者が組織の存亡をかけて闘う三里塚・ジェット闘争を圧殺しようとする、これが労働組合のやることだろうか。

われわれは、労働者として、労働組合本来の闘いとして、この組織内の反動を打ち破り、反対同盟との連帯を強化し闘い抜いてきた。二期工事粉砕―ジェット増送計画阻止に向けて、今後さらには闘いぬかなければならない。「本部」革マル反動集団の三里塚敵対を許さず断固闘う中から正義を主張しつづけてゆこうではないか。

7・28国民大集会

●とき 7月28日(土)午後5時半
●ところ 千葉市民会館

産報運動と労働運動の危機(四)

(三) 産業戦士

「産業報告会」は、その綱領で「我等は国体の本義に徹し、全産業一体報国の実をあげて、もって皇運を扶養し奉らんことを期す」……事業一家職分奉公……とうたっている。

この精神のもとで労働者は「五人組制」を基礎とした部隊組織に編成され、警察権力がいつでも介入できる体制のもとにがんじがらめにされ、「大君に奉仕する光榮を担う産業戦士」にならなければならない。低賃金、劣悪な労働環境、超長時間の過酷な労働の「滅私奉公」によって精神も肉体もすりへらし、それでもなお不満も言わ



増産に必死の「産業戦士」
「元帥の仇」とは連合艦隊司令長官山本五十六の戦死を指す。

ず「お国のため、天子様のため」に犠牲を重ねて生産を続けることが「尊い」とされ、少し

でも不満や批判を口にする者は「非国民・アカ」呼ばわりされて特高警察に弾圧されたのである。指導部が「内からの改革」を唱えても、労働組合という団結の力による対決を放棄したところには産報の波に呑み込まれる以外の道はなかったのだ。

こうして「非常時」「ほしがりません勝つまでは」と、自らの闘いの武器労働組合を解散し、資本家への対決を一切やめて労資協調に走り、「企業再建・国家再建」に捧じた幾千万の労働者の上にもたらされたものは、まさに死ぬ地獄、生きるも地獄のあの朝鮮・中国、アジア民衆虐殺の侵略戦争の犯罪、太平洋戦争の悲惨だったのである。「天皇」の前にひざまずいて魂を売った労働者は結局このようにして葬られていかざるを得なかったのである。(つづく)